

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 14 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24700627

研究課題名(和文)原発事故を受けた子どもの日常回帰を支援する“表現あそびプログラム”の開発

研究課題名(英文)The development of "expression play program" for the children who received a nuclear accident

研究代表者

弓削田 綾乃 (YUGETA, AYANO)

早稲田大学・グローバルエデュケーションセンター・助教

研究者番号：90432038

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、東日本大震災後、関東から東北地方にかけて、屋内外での身体運動に対して不安を抱く保護者が急増したことを受け、心身に効果的な“身体表現あそび”の実践と検証を通して、日常生活にとり入れられる効果的なプログラムの開発を目指したものである。その結果、心身の発達を考慮し、自己と他者への気づきを促し、身近な題材で触れ合え、心身の解放と自立のトリガーとなることが重要であると考察し、これらに即した家庭での表現あそびを支援した。

研究成果の概要(英文)：At the big earthquake in 2011, the nuclear accident happened and the people was anxiety for playing outside. This research aimed to propose "physical expression play" which can be implemented in home.

As a result, I thought the following four were important. 1.The growth of the mind and body. 2.The awareness about a self and others. 3.The body contact. The familiar theme. 4.The free of mind and body, and the developing of children's independence. Then, this research proposed "physical expression play" in the according to these.

研究分野：舞踊教育、舞踊人類学

キーワード：子どもの身体表現あそび 親子の触れ合いあそび

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 原発事故により屋外活動を制限された福島県内で開催された2011年7・8月の児童夏季林間学校(市教育委員会主催)において、ダンス教室に参加した親子へのヒアリングを試みた。その結果、身体表現活動を通して、運動欲求の充足だけでなく、心身に有意な効果があることが予測された。その一方で、人々の日常生活での不安が大きいことも明らかになった。これらのことから、生活に身体表現活動を取り入れることが、有効に働くのではないかと考えた。

(2) 阪神淡路大震災後にアートセラピーとして現代的ダンス・伝承舞踊が実践された際の功績や、地域文化の再起が復興の要だったという複数の提言に加えて、東日本大震災後の被災地での祭礼の実施が地域の活力につながったという事例報告がなされていた(林・中川ら 2011)。これを受けて、地域、ダンス、伝承舞踊、被災者といった諸要素を結びつけることに意義があるのではないかと考えた。

## 2. 研究の目的

本研究は、東日本大震災後、関東から東北地方にかけて、屋内外での身体運動に対して不安を抱く保護者が急増したことを受け、心身に効果的な“身体表現あそび”の実践と検証を通して、日常生活にとり入れられる効果的なプログラムの開発を目指したものである。

## 3. 研究の方法

(1) 初年度は、原発事故の影響が強い福島県K市の親子を対象として、“身体表現あそび”のワークショップの実施、ならびに関係者へのヒアリングを行った。そして、参加者の反応と感想の傾向とを分析し、効果の検証と課題を明示した。

(2) 2年目以降は、千葉県内での“身体表現あそび”の実践やワークショップ等を通して、内容を精査することに重点をおいた。また、継続的な活動者にヒアリングを実施し、KJ法で分析して日常への影響を検証した。

## 4. 研究成果

(1) 福島県K市での身体表現ワークショップの実践と検証における成果

### ワークショップの実施

2012年8月～9月に4回のワークショップを福島県K市で実施した。4回の内容は、以下の通りである。

1. 親子体操とリズムダンス、
2. キッズヨガ、
3. 伝承的な音楽と動きでの表現あそび、
4. 布

### を用いた表現

ワークショップ実施にあたっては、9名の方々に講師ならびにアシスタントを依頼し、様々な観点からのプログラム発案と実践、課題の提示等にご協力いただいた。参加者は、0歳～4歳の乳幼児と保護者、のべ144人であった。

### 子どもと保護者の反応

以下の2つの事例に代表されるように、身体表現を通して、子どもは身近な動きやモノへの反応が豊かであること、保護者は共に表現することによって、それに対する気づきを得られることが明らかになった。

<事例> 皆で大きな輪をつくり、音楽にあわせて後ろ向きに歩いて表現する場面で、1歳11か月の男児が、周りの輪からはずれて、ひたすら後ろ向きで歩き続けた。心と体に伝わる感触に没頭し、自分なりの世界を広げていたと思われる。これに対する保護者の反応は、「いつもお兄ちゃんの真似ばかりで、自分から何かをすることがあまりないのに、ただ歩くだけことに、こんなに夢中になるなんて。」という驚きであった。男児も保護者も、互いに身体を通して気づきを得ていたことが窺える。

<事例> お祭りの鈴や太鼓などを用いた表現の場面で、鈴を一人一つ受け取ると、子どもたちは走る、跳躍する、転がる、じっと音に耳を傾ける、鈴を凝視する、他者の首にかける等、様々な反応をみせた。これに対する保護者らの反応は、「決まった使い方だけでなくもいい、好きなように遊んでいいと見守り、声をかけると、子どもは自分からいろいろなことをする」というものであった。これは、布を用いた際にも同様の声があがっており、「何もできないと思っていたが、子どもなりに感じて楽しんでいる」という保護者もいた。

### 参加者の感想

毎回、保護者の感想(アンケート・自由記述有)を収集した。その結果、次のような特徴があげられた。

「表現あそびを通して、お子さんについて、または自身について、新しい発見はありましたか?」という質問に対しては、18人中12人が「はい」と答えていた。「音楽にあわせて自分で好きなように踊っていた」「音に対しても興味があるんだなあ」といった、子どものいきいきとした表現に対する気づき、「いつもはお友達がやっても体を動かすなどができない長女と一緒にできていた」「子ども同士のコミュニケーションがとれていた」「意外に慎重」といった、子どもの成長や一面に対する気づき、「自分も子どものように体を動かしてリフレッシュ」「型にはまらない発想、自由にできて楽しめ、自分自身の発見にもつながった」といった、保護者自身の心の開放など、それぞれの感じ方・

とらえ方で、気づきが得られたことが窺える。

また、創造性については、「布 1 枚でいろいろなあそびが生まれて、子どもたちの想像力も深まる」「こんなこともできる、あんなこともできるという発見」「とても活発なので、どんな遊びをすればストレスがなくなり楽しめるかがわからなかったが、ちょっとしたことで子どもは楽しめるのだな」といった回答があった。表現あそびの楽しさと拡がりの可能性を知り、身体があれば、身近にある題材、興味を抱いた題材を使って、表現あそびを実践できることに気づいたものと考えられる。また表現あそびでは、お互いに触れ合う機会が多く、心と心の交感が生まれる。そうしたことを感じ取ったと思われる感想（「子どもと触れ合うことの大切さ」「手と手をあわせる」等）もあり、表現あそびが乳幼児期の親子のふれあいに適していることが理解できる。こうした親子共同での感受性の育みは、継続的な活動によって、さらに深まっていくものと考えられる。

子どもの心には、いろいろな刺激が、その子なりの感じ方でスーッと入ってくる。そうして五感で感じ取ったことを身体で思うままに表現させると、言葉よりも率直で、あっと驚くようなものが、しばしば出てくる。それを、保護者も見過ごさずに受け止めて、心のやりとりをしたのが、今回の表現あそびだったと考える。「一緒に表現を分かち合う」体験を重ねることで、子どもだけでなく、保護者自身も感受性を育てていることを、感覚的に味わったのではないだろうか。

なお、継続的活動については、この事例では検討できなかった。しかし、4 回中 3 回に参加した親子の反応ならびに感想に注目すると、回数を重ねるにつれて、親子が離れている時間が長くなったと記していた。心身のほぐし、身体表現、他者との交流などの積み重ねが、男児の自立を促したことが推測された。

## （2）千葉県での身体表現ワークショップの実施と検証における成果

### ワークショップの実施

上記経過を受けて、プログラムの内容および継続による効果の検証を遂行するため、千葉県および東京都内での身体表現ワークショップを行った。2013 年 8 月～2014 年 2 月にかけて、ほぼ月に 1 回の割合で継続した。参加者は、実施地域に住む 0～9 歳の子どもと保護者らである。表現あそびの内容については、民族舞踊実践者、リラクゼーション指導者、演劇指導者、幼児教育専門家、音楽実践者らに協力を仰ぎ、検討した。このようにして試行した内容について、参加者にアンケートを実施し、KJ 法で分析した。また、4 回以上参加した 4 名の保護者にヒアリングを行い、日常での変化および影響を検討した。

### プログラムの検討

アンケートからは、モノを使うことに対する感想が窺えた。それは、印象に残った場面として、「モノを使ってあそぶ場面」をあげる保護者が多かったことにも表れている。子どもの反応として、「自由」「のびのび」「いつもと違う使い方をしている」等の記述がみられ、親子ともに「想像がふくらむ」ことへの気づきがあげられていた。また、「何かになる」場面や、「ストーリーを創って表現する」場面での、豊かな表現との出会いもあげられた。想像力・創造力が、身体表現と結びつくことや、自由な表現というものが案外難しいものであること等、新鮮な驚きもたらされたことが注目される。

テーマ、物、音楽等に季節感、日常性、非日常性などを混在させ、個々のイメージ世界を深めることで、グループでの表現に発展した事例が認められた。参加者の人数や顔ぶれ、反応によって展開の変更が必要であることは言うまでもないが、テーマ、物、音楽等に季節感、日常性、非日常性などを混在させた上で、個々がもつイメージ世界をじっくり深めさせることが、集団での豊かな表現につながっていくのではないかと考えた。

### 日常への影響

表現あそびに 6 回参加した幼児親子に着目した。

対象児は、表現に入り込める時と、入り込めない時の差が大きく、当初保護者からは「集中できない」「周りと同じことができない」等の声が聞かれた。しかし、海の写真集を見ながら表現した回には、対象児が周りを引き込むようなダイナミックな動きを見せた。それを目の当たりにした保護者は、もともと対象児の関心が「海」にあることを想起し、日常生活でも「海」を連想する言葉がけ・あそびを心がけるようにしたところ、いわゆる「ぐずり」が減ったという。また、保護者の印象として、「母と自分」という感じだったものが、「みんなと自分」に変化してきたことをあげ、親子ともに心に余裕ができたように感じる、という感想をもたらした。これらのことから、表現が個々の日常と結びつき、コミュニケーションの一助となりうると同時に、表現を通して、他者との関係の再構築が図られている可能性があると考えられた。

## （3）総括と展望

### 総括

本研究では、東日本大震災時の原発事故の影響を多大に受けた地域でのヒアリングならびに表現あそびの実践によって、必要な課題を抽出し、実践の繰り返しによってプログラムの精査を試みた。結果を総括すると、次の 4 点に集約すると考える。

第一に、子どもたちの発達段階を考慮した内容だった点である。複数の講師、専門家、アシスタントと協同し、乳幼児期の心身の発

達を協議しながら作成したプログラムであった。毎回のテーマと目的が明確であり、配布資料での詳細解説が家庭でのあそびへの展開を支援したと考える。

第二に、気づきに満ちた内容だった点である。創造的な表現あそびを中心に、キッズジムに基づく親子体操、キッズヨガ等に至るまで、子どもの主体性を重視して欲求を引き出し、つなげていったと考える。「表現あそびは初めて」という保護者が多かったが、我が子あるいは自分自身の身体と向き合い、それぞれの視点・感覚での気づきをもたらされたことが窺えた。

第三に、家庭でできるあそびの提案だった点である。「子どもの遊びがよくわからない」「どうしたら親子で楽しめるのか」という切実な思いを抱える母親は、一人や二人ではなかった。そうしたなかで、「身近な題材で体を動かすあそび」「触れ合いながら楽しむことの重要性」への気づきを促したと考える。

第四に、身体表現は、あそびを豊かにするだけでなく、日常生活への影響の可能性を指摘できる点である。表現あそびが、親子の心身の解放と自立のトリガー的役割を果たしていることが推測できた。

#### 展望

課題としては、以下のことがあげられる。

家庭や居住地域という、教育現場とは異なる社会では、地域性や個々の状況・生活スタイル等を勘案する必要があると思われた。

また、報告書（『みんなであそぼう 表現あそび』：プログラム提案を含む）を作成したものの、地域への還元が充分でなかったと省みている。特に、原発事故の影響が大きかった初年度の調査地での追跡調査を試みることが今後必要だろう。

また、伝承舞踊の活用については、有効な手法を模索中であり、検討の余地を残した。

本研究を鑑みると、身体表現の共創的資質は、多様な人が集う地域活動の場に活用することで、個人と地域社会とを相互に成熟させる教育力を有すると考えられる。この見地から、地域に根差した身体表現活動に焦点を当て、「身体表現活動と地域社会とが相互に関わり合いながら豊かな人間、豊かな社会を育てていく」という仮説を立て、実践と分析・検討を重ねて検証し、活動モデルの構築と発信を目指すことが、今後の展望である。

#### <引用文献>

林敏彦・中川武他「シンポジウム資料 早稲田大学が取り組む復興研究 大規模災害からの復興と新社会システムの構築に向けて」2011、早稲田大学

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

#### 〔雑誌論文〕(計2件)

弓削田綾乃、地域のなかで表現あそび～いろいろな人がいろいろな形で～、女子体育、査読無、第56巻4・5月号、2014、16 - 21 .

弓削田綾乃、ダンスの力を考える～原発事故の影響を受けた子どもたちの笑顔と元気のために～、女子体育、査読無、第54巻6・7月号、28 - 31 .

#### 〔学会発表〕(計5件)

弓削田綾乃、創造的身体表現における伝承文化との出会い～実践研究の検討を中心に、第15回日本スポーツ人類学会大会、2014年3月27日、東京学芸大学(東京都・小金井市)

弓削田綾乃、一柳智子、「うねめまつり」にみるイベント型の祭りにおける舞踊震災復興との関わりも含めて、第29回民族芸術学会大会、2013年4月29日、郡山女子大学(福島県・郡山市)

弓削田綾乃、福島県郡山市の「うねめまつり」にみる地域コミュニティと祭りと震災復興、第14回日本スポーツ人類学会大会、2013年3月24日、金沢大学(石川県・金沢市)

弓削田綾乃、竹内エリカ、福島県郡山市の乳幼児親子を対象とした身体あそびの実践報告、第64回舞踊学会大会、2012年12月1日、東京大学(東京都・文京区)

弓削田綾乃、舞踊と支援活動 - 原発事故を受けた地域行政からみえてくるもの、第17回舞踊学会定例研究会、2012年6月3日、立命館大学(京都府・京都市)

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

弓削田 綾乃 (YUGETA, Ayano)

早稲田大学・グローバルエデュケーションセンター・助教

研究者番号：90432038